



6. ポール・ドラローシュ《レディ・ジェーン・グレイの処刑》1833年 油彩・カンヴァス ロンドン・ナショナル・ギャラリー
Paul Delaroche, The Execution of Lady Jane Grey, © The National Gallery, London. Bequeathed by the Second Lord Cheylesmore, 1902

怖い絵展

本展のみどころ

①「恐怖」というテーマ性をもったこれまでにない切り口の展覧会！

- * 視覚的な怖さだけでなく、隠された背景を知ること
で判明する恐怖まで、「恐怖」をテーマに約80点の
西洋絵画・版画を展示。
- * 「この絵はなぜ怖い？」その怖さを読み解くヒントと
ともに絵画を鑑賞！
- * ターナー、モロー、セザンヌなど、ヨーロッパ近代
絵画の巨匠による”怖い”作品もセレクト！

②ロンドン・ナショナル・ギャラリーの至宝

《レディ・ジェーン・グレイの処刑》が奇跡の初来日！

- * 本展最大の注目作は、縦2.5m、幅3mにもおよぶ、
ポール・ドラローシュの大作《レディ・ジェーン・
グレイの処刑》。ジェーン・グレイは、イングランド
史上初の女王となるも、わずか9日後に廃位され、

その7ヶ月後、16歳で散った悲劇の人物。その最期
を繊細な筆致と緻密な構成で描いた本作は、まさに
圧巻の一言。

- * 1928年のテムズ川の大洪水により失われた考えられ
ていたが、1973年の調査で奇跡的に発見される。
1975年の一般公開再開以来、瞬く間にナショナル・
ギャラリーの代表作品となった奇跡の作品が初来日。

③ベストセラー『怖い絵』シリーズ著者・中野京子氏 特別監修！

- * 展覧会のために新たに選び抜いた“怖い絵”が続々登場！
- * ポール・ドラローシュの《レディ・ジェーン・グレ
イの処刑》のほか、ハーバート・ジェイムズ・ドレ
イパーの《オデュッセウスとセイレーン》や、ウィリ
アム・ホガースの『ビール街とジン横丁』より《ジ
ン横丁》など、『怖い絵』シリーズで紹介された作品
も展示。

開催趣旨

「怖さは想像の友です。想像によって恐怖は生まれ、恐怖によって想像は羽ばたく。」(中野京子)

ドイツ文学者・中野京子氏が2007年に上梓した『怖い絵』は、「恐怖」をキーワードに西洋美術史に登場する様々な名画の魅力を読み解く好著として大きな反響を呼びました。これは、絵画が内包する情報をスリリングに掘り起こす氏の手腕もさることながら、「恐怖」という忌むべき感情に対して我々が抱く抗いがたい好奇心を強く刺激したからに他なりません。

同書の第1巻が刊行されてから10周年を記念して開催する本展は、中野氏がシリーズで取り上げた作品を筆頭に、近世から近代にかけてのヨーロッパ各国で描かれた「恐怖」を主題とする膨大な絵画の中から油彩画と版画の傑作を選び出し、神話、怪物、異界、現実、風景、歴史といったテーマに分けて展示します。視覚的に直接怖さが伝わるものから、歴史的背景やシチュエーションを知ることによって初めて怖さが発生するものまで、普段私たちが美術に求める「美」にも匹敵する「恐怖」の魅惑を網羅的に紹介します。

開催情報

「怖い絵」展

<http://www.kowaie.com>

会期 2017年7月22日(土)～9月18日(月・祝)

開館時間 午前10時-午後6時
(金・土曜日は夜間開館、午後8時まで)
入場は閉館の30分前まで

休館日 月曜日(ただし、9月18日(月・祝)は開館)

主催

兵庫県立美術館、産経新聞社、関西テレビ放送、神戸新聞社


後援

公益財団法人 伊藤文化財団、兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、ラジオ大阪、サンケイリビング新聞社、サンケイスポーツ、夕刊フジ、サンテレビジョン、ラジオ関西

協賛 日本写真印刷、TKG Foundation of Arts & Culture

協力 日本航空、KADOKAWA、NHK出版

企画協力 アルティス、Art Sanjo、FCI

 平成29年度 文化庁
文化芸術創造活用プラットフォーム・フォーム形成事業

観覧料金

一般1,400(1,200)円、大学生1,000(800)円、70歳以上700(600)円、高校生以下無料
※()内は前売料金(一般・大学生のみ)および20名以上の団体割引料金
※障がいのある方は各当日料金の半額(70歳以上を除く)、その介護の方1名は無料

主なチケット販売場所

チケットぴあ(Pコード:768-292)、ローソンチケット(Lコード:52807)、セブンイレブン、イープラス、CNプレイガイドほか京阪神のプレイガイド

1. 神話と聖書

ギリシャ・ローマ神話や聖書で語られる物語は、必ずしも幸福なものばかりではなく、人間に苦難を強いたり、悲劇的な結末を迎えるものも少なくない。というのも、神話や宗教は、本質的に人間には抗うことのできない超越的な力や摂理を抽出するものだからである。本章では、神の意志や気まぐれに翻弄される人間の悲喜劇を描いた絵画を紹介する。

《オデュッセウスに杯を差し出すキルケー》

キルケーは、古代ギリシャの叙事詩『オデュッセイア』の登場人物で、男たちを魔術で動物に変えてしまう恐るべき魔女。ヴィクトリア朝の画家ウォーターハウスが描いた本作では、薄衣をまとって玉座に座り、右手の杯を高々と掲げる傲慢な姿で描かれている。挑発的に反らせた顎と上気した紅い頬に、彼女の慢心と興奮を見とることができる。玉座の背後に置かれた楕円形の大鏡の片隅に映るのは英雄オデュッセウス。オデュッセウスが杯を飲み干すや、キルケーが左手に持つ魔法の杖が頭上に振り下ろされるにちがいない。周囲に転がる豚は、一足先に犠牲となった憐れな部下たちである。



1. ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス
 《オデュッセウスに杯を差し出すキルケー》
 1891年 油彩・カンヴァス オールダム美術館
 © Image courtesy of Gallery Oldham

2. 悪魔、地獄、怪物

ヨーロッパのキリスト教世界では、人間を墮落させ悪の道へと誘う者として悪魔という存在が長きに亘って想像されてきた。また、人間が生前犯した罪の報いを受ける死後の世界として、地獄のイメージが伝統的に培われてきた。本章では、近代にまで命脈を保った悪魔や地獄のイメージや、それに近接する怪物の主題を描いた作品を取り上げる。

《彼女》

マン・イーター、男を喰う女、である。彼女の下に血を流しながら累々と横たわる「彼ら」がそれを示している。不吉な指輪をはめて、人間の山に横座りする彼女。腰のあたりの腕と腕の間に猫が顔をのぞかせている。首飾りにつけた、剣、棍棒、拳銃（その示すところは明らかだ）。頭に3つの髑髏と2羽の鴉^{からす}。1～2世紀のローマの詩人によるラテン語句「これが私の命令だ。私の意志は理性にとってかわる」が書かれた金色の円を背負い、まっすぐにこちらを見つめる彼女は、まさしくわれわれに君臨している。作者はニース生まれで、20歳代までこうした世紀末の象徴主義的作品を描いていた。第一次世界大戦に応召し負傷して帰郷後は、父親の跡を継いで、ニース美術館の館員となり、ニースのカーニバルのポスターなどを手がけた。

NO IMAGE

2. ギュスターヴ=アドルフ・モッサ《彼女》1905年
 油彩・カンヴァス ニース美術館

※作品図版掲載時は、要クレジット表記
 （本紙末尾「広報画像申込書」参照）

※作品図版は、**展示会チラシ**をご覧ください。

3. 異界と幻視

人は、自らの日常生活の外にそれとは違う論理に支配された異界というべき空間を想像してきた。とりわけロマン主義以降の美術では、異界が時として日常生活の狭間や我々自身の内面に発生する様子を幻視するかのような作品が数多く生み出された。本章では、我々の住む世界の自明性を脅かすさまざまな異界の表現を紹介する。

《そして妖精たちは服を持って逃げた》

草の上で日向ぼっこしている母親と赤ん坊。爽やかな光に満ちた平和な情景だが、よく見ると小さな妖精の姿が見える。本作は、19世紀末の妖精画ブームの流れに沿って描かれた作品だが、キャラクター化された同時代の妖精とは一味違い、印象派風の素早いタッチやスナップショット的な構図のなかに見え隠れする妖精たちが奇妙なリアリティを感じさせる。同じころ、二人の少女が妖精のイラストを本物と偽って写真に撮って世間を騒がせた「コティングリー妖精事件」が起り、大勢の人がだまされた。この絵の作者シムズの心中にも妖精という不可思議な存在を信じたい気持ちがあったのだろうか。



3. チャールズ・シムズ《そして妖精たちは服を持って逃げた》
 1918-19年頃 油彩・カンヴァス リーズ美術館
 © Leeds Museums and Galleries (Leeds Art Gallery) U.K. /
 Bridgeman Images

4. 現実

人間が生きる現実には、様々な恐怖と苦悩に満ち満ちている。なかでも最大にして最も普遍的な恐怖は死である。死は、犯罪や戦争とともに、画家たちにとって重要な主題であった。また、現実の世界には、死以外にも様々な不条理が潜んでいる。本章では、死の場面を中心に、現実の中に存在するいくつもの闇を描いた絵画に焦点を当てる。

《ビール街とジン横丁》

安酒ジンを飲んで死に至る悲惨な生活を送る人々が描かれている。ここにあるのは、「死」の匂いだ。埋葬の情景や首吊り人が画面奥に見え、前景で階段に座る男の顔にも明らかに死相が漂っている。泥酔して子供を放り出してしまう母親の脚は腫れ物だらけで、よほど健康を害しているようだ。一方、質屋は繁盛しているのか貴族のような主人が、飲み代を得ようとして商売道具や鍋釜まで持ち込む客と何やら話している。当時、ビールに高い税金がかけられ、蒸留酒であるジンにはそれがなく安かったため、貧乏人はジンを飲むしかなかった。しかもアルコール度数が高いのですぐに酔える。生活のウサを晴らすという以上に、酔いに逃避する習慣が行きつく先を示して不気味な作品である。



4. ウィリアム・ホガース『ビール街とジン横丁』より《ジン横丁》
 1750-51年 エッチング、エングレーヴィング・紙
 郡山市立美術館 © Koriyama City Museum of Art

5. 崇高の風景

18世紀から19世紀にかけてのロマン主義時代、風景画は新たな展開を遂げた。歴史画の背景として発達した理想的風景や特定の場所のありのままの姿を描写する地誌的風景に加え、なんらかの感情や気分を暗示的に表現する主情的・主観的な風景画が生まれ出されたのである。本章では、特に「崇高」の美学を反映した作例を取り上げ、背後に隠された不安や恐怖の感情を読む。

《ドルバダーン城》

ドルバダーン城は、ウェールズ北西部の古城。この近くのスノードン山界隈は荒々しい景観によって知られ、18世紀英国の画家たちにとって、絵になる景色を探す旅の格好の目的地となっていた。ターナーも、荒涼たる眺めに魅せられていくつかのスケッチを残した。その結実である本作は、ごつごつとした陰鬱な山、湧き上がる不穏な雲、陽光を背に寂寞とした姿を浮かべる城の廃墟を描いている。この絵が描かれる遙か500年以上前、中世ウェールズの王族オワイン＝ゴッホ＝アブ＝グリフィズは、弟との権力争いに敗れて1255年から1277年までこの城に幽閉されたという。前景に小さく描かれた人物は、もしかしたら牢獄へと引き立てられるオワインかもしれない。



5. ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー
 《ドルバダーン城》1800年 油彩・カンヴァス
 ロイヤル・アカデミー
 © Royal Academy of Arts, London; Photographer:
 Prudence Cuming Associates Limited

6. 歴史

人間の歴史とは、激しい権力闘争の歴史でもある。ヨーロッパにおいてもそれは例外ではなく一度は栄華を誇った王侯貴族であっても、ひとたび争いに敗れてしまえば無残な末路が待ち受けていた。本章では、ドラローシュの《レディ・ジェーン・グレイの処刑》を中心に、歴史を彩る悲劇的なエピソードや運命に翻弄された人々の姿を描いた作品を特集する。

《レディ・ジェーン・グレイの処刑》

1553年7月にエドワード6世が亡くなると、時の権力者ノーサンバランド公は、自分の息子と結婚させていたヘンリー7世の曾孫ジェーン・グレイを女王に担ぎ出した。王位継承最有力候補はヘンリー8世の娘メアリーだったが、厳格なカトリック信者の彼女が王になることをノーサンバランド公は恐れたのだ。しかしジェーンは在位わずか9日でメアリー支持勢力によって王座を追われ、1554年2月に夫とともにロンドン塔で処刑された。イングランド一の才女とも謳われた才色兼備のジェーンは、16歳であった。19世紀前半にフランスで活躍した画家ドラローシュによる本作は、この史実に基づく場面を現場で見ているかのように緻密に描いたが、実際には処刑は戸外で行われ、服装も時代が違うという指摘がある。若く美しい女性の悲劇を演劇的な場面として描いた作品である。



6. ポール・ドラローシュ《レディ・ジェーン・グレイの処刑》
 1833年 油彩・カンヴァス ロンドン・ナショナル・ギャラリー
 Paul Delaroche, The Execution of Lady Jane Grey, © The
 National Gallery, London. Bequeathed by the Second Lord
 Chelyesmore, 1902

関連イベント

記念講演会

「怖い絵」の世界へようこそ

講師：中野京子氏（本展特別監修者、作家、ドイツ文学者）

日時：8月20日（日）午後2時～（約90分）

会場：ミュージアムホール（定員250名）

聴講無料（要観覧券、当日午前11時からホワイトエで整理券配布）

学芸員による解説会

日時：8月5日（土）、9月2日（土）、9月16日（土）

各日午後4時～（約45分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

聴講無料

こどものイベント

「もっと怖い絵」をかこう！

日時：8月26日（土）午前10時15分～／午後2時～（各回2時間15分）

会場：レクチャールーム（定員30名）

参加費：200円（要事前申込）

※申込受付は7月26日よりこどものイベント係
（TEL:078-262-0908）まで。

ミュージアム・ボランティアによる解説

日時：会期中毎週日曜日 午前11時～（約15分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

聴講無料

お問い合わせ先

兵庫県立美術館 <http://www.artm.pref.hyogo.jp/>

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

Tel: 078-262-0901（代表） Fax: 078-262-0903

取材・写真提供に関すること

営業・広報グループ

Tel: 078-262-0905（グループ直通） Fax: 078-262-0903

展示内容に関すること

担当学芸員：岡本弘毅、小林公、西田桐子

e-mail: okamoto@artm.pref.hyogo.jp

Tel: 078-262-0909 Fax: 078-262-0913

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の申込書をご使用ください。

【同時開催の展覧会】

県美プレミアム

小企画 美術の中のかたち 手で見る造形

青木千絵展 漆黒の身体（仮称）

特集 新収蔵品紹介（仮称）

7月8日（土）～10月15日（日）

横尾忠則現代美術館

「開館5周年記念展 ヨコオ・ワールド・ツアー」

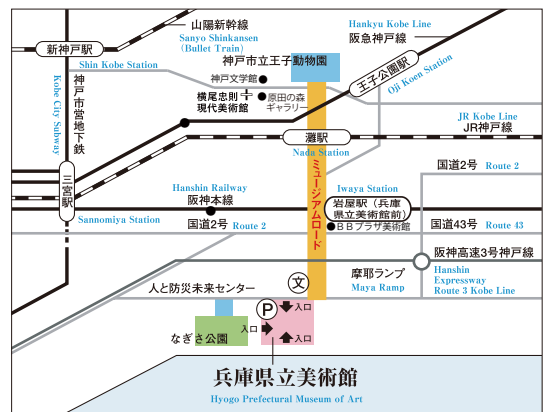
4月15日（土）～8月20日（日）

「開館5周年記念展 横尾忠則 HANGA JUNGLE」

9月9日（土）～12月24日（日）

【交通案内】

- ・阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から南に徒歩約8分
 - ・JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
 - ・阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
 - ・JP三ノ宮駅南から神戸市バス（29、101系統）阪神バスにて約15分HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
 - ・地下駐車場（乗用車80台収容・有料）
- *ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
*団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



特別展「怖い絵」展 2017年7月22日(土)～9月18日(月・祝)

営業・広報グループ 宛 FAX (078) 262-0903 電話 (078) 262-0905 (直通)

ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データ (.jpg) をお送りいたします。

番号	作家名・作品名・制作年 など
1	ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス 《オデュッセウスに杯を差し出すキルケー》 1891年 油彩・カンヴァス オールダム美術館 © Image courtesy of Gallery Oldham
2	ギュスターヴ＝アドルフ・モッサ 《彼女》1905年 油彩・カンヴァス ニース美術館 ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2017 G0888, Collection Musée des Beaux-Arts Jules Chéret, Nice- Photo Muriel ANSSENS ※本作品は著作権が保護されています。下記の注意事項(※7)をご一読ください。
3	チャールズ・シムズ 《そして妖精たちは服を持って逃げた》1918-19年頃 油彩・カンヴァス リーズ美術館 © Leeds Museums and Galleries (Leeds Art Gallery) U.K. / Bridgeman Images
4	ウィリアム・ホガース 『ビール街とジン横丁』より 《ジン横丁》1750-51年 エッチング、エングレーヴィング・紙 郡山市立美術館 © Koriyama City Museum of Art
5	ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー 《ドルバダーン城》1800年 油彩・カンヴァス ロイヤル・アカデミー © Royal Academy of Arts, London; Photographer: Prudence Cuming Associates Limited
6	ポール・ドラローシュ 《レディ・ジェーン・グレイの処刑》1833年 油彩・カンヴァス ロンドン・ナショナル・ギャラリー Paul Delaroche, The Execution of Lady Jane Grey, © The National Gallery, London. Bequeathed by the Second Lord Cheylesmore, 1902

※1 上記作品画像を媒体掲載される際には、記載の**作家名・作品名・制作年・クレジット**などを必ず入れてください。

※2 作品画像は**全図で使用**してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変はできません。

※3 画像データ使用は、本展覧会の紹介のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません。(会期終了まで)

※4 再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

※5 Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施してください。

※6 基本情報、図版使用の確認のため、グラ刷り・原稿の段階で営業・広報グループまでお送り願います。

※7 **作品番号2：モッサ《彼女》については、著作権が保護されています。**

ご掲載いただく際、以下を厳守いただける場合のみ、著作権使用申請および使用料負担は主催者で一括して対応します。

- ・解説テキストは、400字以内とすること(展覧会情報は文字数に含めない)
- ・作品画像の掲載サイズは、50平方センチメートル未満とすること

なお、Webサイト・テレビでのご紹介については別途、各自で著作権使用申請および使用料負担をいただくこととなります(時事の報道としてご紹介いただく場合を除く)。

貴社名			
媒体名	新聞・雑誌・ミニコミ 『 TV・ラジオ・インターネット 』		
ご担当者名			
ご住所	〒		
電話番号		FAX	
メールアドレス	@		
URL			
掲載・放送予定日		画像到着 希望日	
読者・視聴者プレゼント用招待券(最大5組10名まで 本展を媒体でご紹介いただける場合に限り)	組 名分希望		

※本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、**掲載誌・紙または記録媒体(VTR/DVD)、URL**などを、上記の営業・広報グループ宛てにお送りくださいますようお願いいたします。

※展覧会場の取材、撮影をご希望の場合は、上記までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。